学位論文要旨

「気になる子」への保育者の理解に関する研究

広島大学大学院教育学研究科

教育学習科学専攻　学習開発学分野

学習開発基礎・支援領域

D184428　劉一杰

目次

第１章　本研究の背景と目的
　第１節　本研究の背景
　第２節　本研究の目的
第２章　「気になる子」に対する保育者の子ども理解とその影響要因（研究１）
　第１節　目的
　第２節　方法
　第３節　結果と考察
第３章　「気になる子」の子ども理解・対応に影響を与える要因―障害児保育経験と省察に着目して―（研究２）
　予備調査
　第１節　目的
　第２節　方法
　第３節　結果と考察
　本調査
　第１節　目的
　第２節　方法
　第３節　結果と考察
第４章　保育者の省察，信念と保育観が「気になる子」の子ども理解に与える影響（研究３）
　第１節　目的
　第２節　方法
　第３節　結果と考察
第５章　総括
　第1節　総合考察
　第2節　本研究の課題と今後の展望

引用文献

第１章　本研究の背景と目的

第１節　本研究の背景

幼稚園・保育園には，保育者から「気になる子」と呼ばれる子どもが多数在籍しており（中島，2014 他），これらの「気になる子」の問題行動の背景には様々な要因が考えられる（城元・舟地，2010；岡田，2012；池田・楠，2019・2020；Thomas&Chees,1986；加藤，2015）。また，「気になる子」の表面上に現れる問題行動や症状が非常に類似していることから（Levy &Orlans，藤岡孝志・ATH 研究会訳，2005；杉山，2011），表面上の行動や一側面の情報のみで子どもの背景を的確に理解することは難しいと考えられる。

保育において，子ども理解は保育実践を展開していく中での出発点として捉えられており，子どもの適切な対応のためには，まずはその背景について丁寧に考慮することが大事である（川西・米山，2015；厚生労働省，2018；池田・坂田，2020）。そこで本研究では，的確な子ども理解を「気になる子どもの問題行動の背景を多視点・多方面の情報から考慮し，多様な可能性および仮説を想定すること」とし，このような子ども理解に繋がる要因について検討する。

保育現場においては，循環的なシステムのモデルが重視されており（厚生労働省，2009），このような形態の理論モデルとして，コルトハーヘン（Korthagen,F.A.J.,2001）の ALACT モデル（行為→行為の振り返り→本質的な諸相への気づき→行為の選択肢の拡大→試み）が挙げられる。ALACT モデルの一環である「本質的な諸相への気づき」の実現には，保育者の専門性が求められる。専門性を向上させるためには，経験から学ぶ能力が必要であり，自分の実践を振り返る省察が重要であるとされている（佐藤，1996；Moon,2004；larrivee,2008）。

省察の他，信念の形成は保育者の成長にとって非常に重要な支柱である（吉岡，2007）。また，保育観の違いも子どもに対する理解と対応に影響を及ぼすと考えられる（佐藤・七木田，2007；陳，2020）。さらに，天野（2023）から，保育者がどのような考えや信念をもって子どもと関わっているかによって保育者の保育実践に差異や変化が生じ，そこから様々な保育観が形成されていき，保育者の専門性および子ども理解の的確性に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

さらに，保育者の学習時間が子ども理解の的確性によい影響を及ぼしていることが示唆されており（Liu・Kurihara，2021），鈴木・潮谷・権・山田（2021）では，知識をもって保育実践に臨むことがよりよいインクルーシブ保育に繋がると述べられている。なお，本研究においては的確な子ども理解を「気になる子どもの問題行動の背景を多視点・多方面の情報から考慮し，多様な可能性および仮説を想定すること」と定義しており，すなわち子どもの問題行動の背景について単一的な視点からしか情報を得ようとしないのであれば，的確な子ども理解には至らないと捉える。

第２節　本研究の目的

これまでの先行研究では，いずれも保育者の「的確な子ども理解」を「気になる子どもの問題行動の背景を多視点・多方面の情報から考慮し，多様な可能性および仮説を想定する」という意味合いで解釈しておらず，子ども理解とその的確性に影響を与える要因についての具体的な検討はされていない。また，保育者の省察について，杉村・朴・若林（2009）は保育における省察の構造を明らかにしたが，省察尺度の 6 つの下位因子が，具体的にどのように子ども理解に影響を与えているのかは検討されていない。さらに，保育観が保育者の実践や専門性に影響を与えることは先行研究（佐藤ら，2007；陳，2020 他）で検証されているが，保育観が省察により変容することでどう子ども理解に影響を及ぼすのか，また，保育者の信念が保育観や子ども理解にどのような影響を及ぼすのかは検討されていない。

これらの課題を踏まえ，本研究ではこれらの課題の解決に向けて，以下のように進めていく。

まず研究 1 では，現場の保育者がどれほど的確に子ども理解ができているのか，実態把握をする。また，年齢・勤務年数・学習時間・研修時間・保護者との直接交流時間の 5 つの要因と子ども理解の関係性について検討する。

次に研究 2 では，研究 1 の結果と考察を踏まえ，省察と障害児保育経験が子ども理解の的確性に及ぼす影響について検討する。

そして研究 3 では，研究 1 と 2 の結果と考察を踏まえ，省察と信念によって変容された保育者の保育観が，子ども理解の的確性に及ぼす影響について検討する。

最後に，研究 1，2，3 の結果と考察を踏まえ，総括にて，どのような理論を基盤とし，どのような要因を重視することで，より「気になる子」に対する理解の的確性が向上するか，そして今後の保育者の専門性の更なる向上のため，より有効な研修のあり方を検討する。

第 2 章　「気になる子」に対する保育者の子ども理解とその影響要因（研究 1）

第 1 節　目的

研究 1 では，現場の保育者がどれほど的確に子ども理解ができているのか実態把握をすること，また，年齢・勤務年数・学習時間・研修時間・保護者との直接交流時間の 5 つの要因と子ども理解の関係性について検討する。

第 2 節　方法

第 1 項　調査対象と調査形式

調査は質問紙と電話による聞き取りで行われた。

質問紙調査は無記名で行われ，調査協力者は幼稚園 6 園，保育園 5 園に勤務する幼稚園教諭 33 名と保育士 39 名の計 72 名であった。電話による聞き取り調査の調査協力者は質問紙調査を行った各幼稚園･保育園の実態をよく知っている代表者 11 名であった。

質問紙調査は 2017 年 11 月中旬から 12 月中旬または 2018 年 11 月末から 12 月末に，郵送配布，郵送回収形式で行われた。電話によるインタビュー調査は後日行われ，質問紙調査を行った時期のことを想起してもらい，回答を求めた。

第 2 項　調査内容

（1）質問紙内容

①フェイスシート

②保育者の子ども理解の的確性を測る 4 つの事例

（2）電話によるインタビュー調査

以下の内容について，各園の実態をよく知る代表者に電話で回答を求めた。

①各園における保育者と保護者一人毎との毎日の平均的な直接交流時間

②保護者と直接的な交流がない，または少ない場合の他の交流手段

第 3 節　結果と考察

年齢，勤務年数，学習時間，研修時間および直接交流時間と子ども理解得点の関係性を明らかにするため，各独立変数の平均値をとり，相関分析と，強制投入法による重回帰分析を行った。結果を Table1，Table2 に示す。

Table 1　相関分析の結果

	1	2	3	4	5	6
1 年齢	-	.71***	.04	-.17	.12	.01
2 勤務年数		-	.07	.03	.28*	.20
3 学習時間			-	.54***	.13	.29*
4 研修時間				-	.26*	.52***
5 直接交流時間					-	.65**
6 子ども理解得点						-

*p<.05　**p<.01 ***p<.001

Table 2　重回帰分析の結果

	年齢	勤務年数	学習時間	研修時間	直接交流時間	F / R^2
子ども理解得点	-.099	.115	.155	.486***	.630*	7.096 / .267***

***p<.001 *p<.05

この結果から，保育者の子ども理解の的確性は経験の長さによって必ずしも決まるものではなく，例え年が若い，勤務年数が短い保育者であっても，常日頃から保育に関連する書籍などを意識的に読んだり，研修に参加する時間を増やしたり，新しい知識や理論を習得することを重視することで，専門性が向上する可能性は十分にあると示唆された。また，研修時間の他に，保護者との直接交流を重視し，交流時間を増やすことで，より詳しく保護者の困り感や家庭での子どもの様子を把握でき，多面的な視点から子どもの様子を把握でき，さらに的確な子ども理解に繋がることが考えられる。

第 3 章　「気になる子」の子ども理解・対応に影響を与える要因
―障害児保育経験と省察に着目して―（研究 2）

予備調査

第1節　目的

本研究においては，研究 1 で使用した事例分析を再度使用し，事例分析で測った的確性と子ども理解についての自己認知で測った的確性との関係性を検討することを目的とする。

第2節　方法

第 1 項　調査対象と時期

保育者 68 名（女性 67 名，男性 1 名）から回答を得た。回答の不備はなかったため，この 68 名を分析対象とした。調査時期は 2022 年 10 月であった。

第 2 項　調査内容

（1）研究 1 で使用した，保育者の子ども理解の的確性を測定する 4 つの事例

（2）子ども理解・対応尺度

赤田（2010）が作成した保育者ストレス評定尺度の第一要因，「子ども理解・対応のストレス」の 9 項目を抽出した。

第 3 節　結果と考察

事例分析によって測定された子ども理解得点と子ども理解の自己認知得点の関係性を確認するため，相関分析を行った。その結果，事例分析と自己認知の点数の間には有意な正の相関がみられた（r=.68，p<.001）。事例分析と自己認知の点数の相関係数は.68 と示されており，強い正の相関が

みられたことから，子ども理解の的確性に対する自己認知の点数が高い保育者は，事例分析の得点も比較的高く，自己認知の点数を保育者の子ども理解の的確性として扱うことは可能と考えられる。

本調査

第 1 節　目的

研究 1 の結果と考察を踏まえ，省察と障害児保育経験が子ども理解に与える影響について，以下のモデルを構築し，検証することを目的とする（Figure1）。

Figure1　仮説モデル

第 2 節　方法

第 1 項　調査対象と時期

保育者 211 名（女性 187 名，男性 23 名，不明 1 名）から回答を得た。調査時期は 2021 年 7 月であった。

第 2 項　調査内容

以下のフェイスシート・自由記述及び尺度によって調査を行った。

（1）フェイスシート

（2）自由記述

（3）省察尺度

杉村・朴・若林（2009）の保育者の省察尺度を用いた。

（4）子ども理解・対応尺度

予備調査と同様。

第 3 節　結果と考察

省察，障害児保育経験，子ども理解，子ども対応の関係を検討するため，共分散構造分析を行ったところ，Figure2 のとおりとなった。

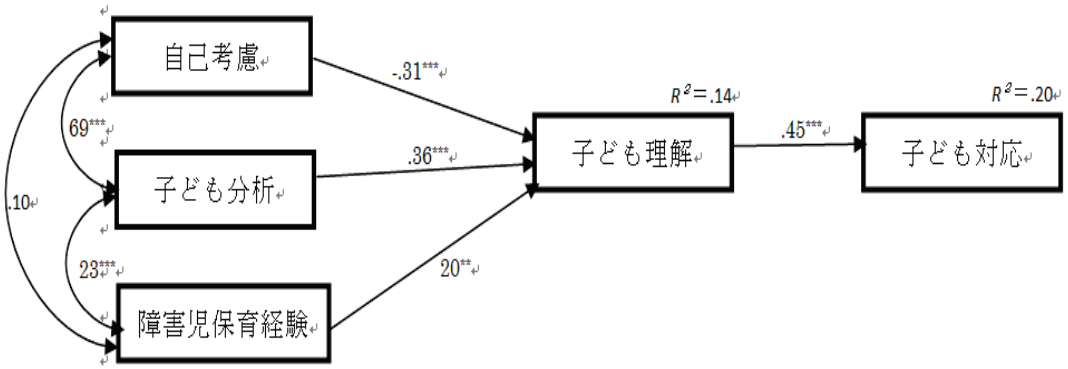

Figure2 子ども理解・対応モデル

GFI=.998, AGFI=.990, CFI=1.00, RMSEA=.000

***p<.001　**p<.01

この結果から，比較的短期及び長期の子どもの発達に関する分析的な省察である「子ども分析」（杉村ら，2009）を行うことは，循環的な，本質的諸相への気づきを経た省察（Korthagen,F.A.J.,2001）に繋がったため，子ども理解の的確性の向上に影響を及ぼしたことが推察される。したがって，保育者は常に子どもに着目して些細な変化と成長に気を配り，子どもの特性に合わせた見通しを立てることが重要と考えられる。一方で，比較的短期及び長期の自己の保育に関する省察である「自己考慮」（杉村ら，2009）は，自己属性の部分に着目して考えてしまう傾向があり，省察ではなく反芻を行ってしまい，子ども理解がうまくいかなくなった可能性が考えられる。また，「自己考慮」と「子ども分析」は，子ども理解を媒介し，子ども対応に影響を与えていることが示された。

さらに，障害児保育経験は，子ども理解を媒介して子ども対応に正の影響を及ぼすことが示された。

第 4 章　保育者の省察，信念と保育観が「気になる子」の子ども理解に与える影響（研究 3）

第 1 節　目的

研究 2 の結果と考察を踏まえ，省察，信念と保育観が子ども理解に与える影響について，以下のモデルを構築し，検証することを目的とする（Figure3）。

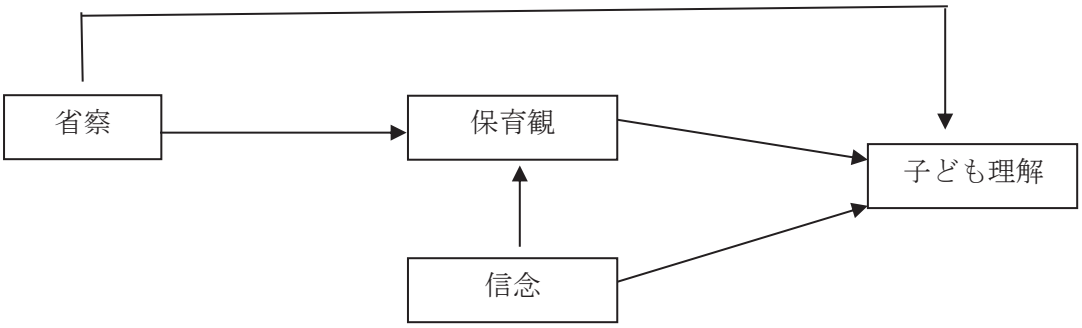

Figure3　保育観，省察，信念と子ども理解の関係のモデル図

第 2 節　方法

第1項　調査対象および調査時期

保育者 72 名およびデータ収集機関を通して得た保育者 104 名，計 176 名の保育者のデータを用いて分析した。調査時期は 2022 年 11 月であり，データ収集機関を通して行った調査の時期は 2022 年 12 月であった。

第2項　調査内容

以下のフェイスシートと尺度によって調査を行った。

（1）フェイスシート

（2）省察尺度

研究 2 同様。

（3）子ども理解・対応尺度

研究 2 同様。

（4）保育観尺度

宮沢・増田（2007）が作成した保育観尺度を用いた。

（5）信念項目

保育者が子ども理解において，理論知識を大事にする信念に関する項目，他者からの情報収集を大事にする信念に関する項目，背景を考慮することを大事にする信念に関する項目を作成した。

第 3 節　結果と考察

省察，信念，保育観，子ども理解の関係を検討するため，共分散構造分析を行ったところ，Figure4 のとおりとなった。

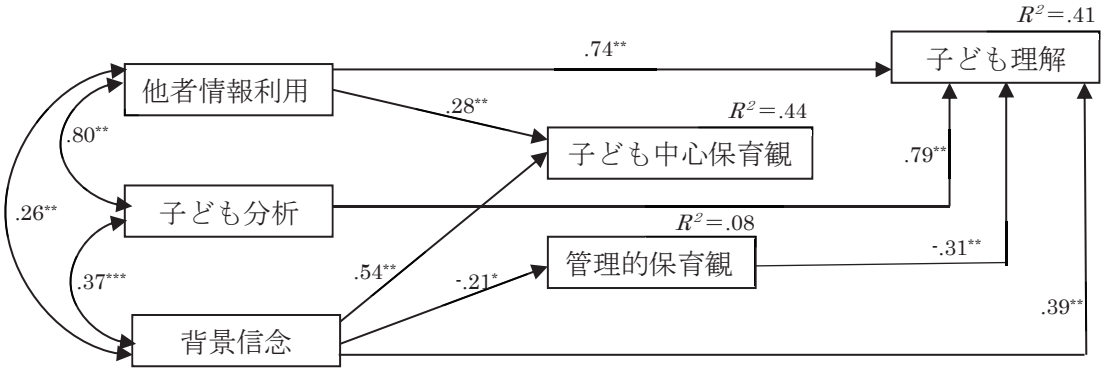

Figure4　子ども理解モデル

GFI=.987, AGFI=.947, CFI=1.00, RMSEA=.000

**p<.001　*p<.05

この結果から，他者との会話や他者の保育の観察によって得られた情報を自己の保育の省察に利用する「他者情報利用」（杉村ら，2009），つまり他者から得た情報を有効に活用することは，コルトハーヘン（Korthagen,F.A.J.,2001）の提唱する ALACT モデルにおける「本質的な諸相への気づき」となり，そこから自身の保育観の見直しに繋がり，子どもの自主性や自立性を重視した「子ども中心保育観」の形成に影響したことが推察される。また，他の保育者の意見を聞いたり，対応の仕方を観察したりすることで新しいことを学習し，それがより的確な子ども理解に繋がったと考えられる。

次に，子どもの行動だけを見るのではなく，家庭など，その背景にあるものも考慮すべきという「背景信念」をもって子どもに接することで，子どもが抱える様々な課題に気づくことができ，子どもは管理しないといけない存在という認識が薄れ，自発的な活動を促すような働きかけを心掛けるようになり，子ども中心保育観が形成され，管理的な保育観が改善されたと考えられる。また，「背景信念」をもち，多方面から情報を収集した上で子ども理解をするべきという意識をもつことで，より的確な子ども理解が可能になったのだろう。

一方で，「管理的保育観」は子ども理解に有意な負の影響を与えていることが示唆された。すなわち，管理的な保育観をもつ保育者は，子どもは管理すべき存在という認識があると考えられるため，子どもの全体像や行動の背景にあるものについて考えることを怠り，子ども理解の的確性に負の影響を与えていたと考えられる。

第 5 章　総括

第 1 節　総合考察

以上のことから，より的確な子ども理解ができるようになるためには，まず，研修が重要と考えられる。しかし，研修時間を長くとるだけが大事ではなく，その研修の中で，自分の実践について，本質

的な諸相への気づきとなる省察が行われているかが，より重要であると考えられる。障害児保育経験についても同様と考えられる。

さらに，他の保育者と話をしたり，他者の保育を観察したりすることで情報や知識を得たり，保護者から子どもの家庭での様子の情報を得たりし，子どもの問題行動の背景について多視点・多方面から着目すべきという信念をもって子どもと関わることは重要だろう。子どものことを常に様々な視点から観察し，子どもの些細な変化と違和感にも気づけるよう，比較的短期及び長期の子どもの発達に関する分析的省察である「子ども分析」（杉村ら，2009）を行っていくことが，より的確な子ども理解に繋がると考えられる。

以上のことから，保育者の専門性向上に向けてのより有効な研修のあり方として，まず，保育者に他視点・多方面から子どもを理解することの重要さを知ってもらうことが必要だろう。これを踏まえた上で，省察の重要さと具体的な省察方法について教えることが必要不可欠と考えられる。保育観の形成と転換においても，障害児保育経験の活用においても，有意義な省察を行うことは非常に重要である。また，研修においては意見交換やグループワークの時間をできるだけ多く確保し，「他者を通した省察」が効果的に行われるよう，他の保育者の保育実践や重視していることについての話を聞いたりし，自分の保育観や保育方針について見つめ直す場を設けることが重要と考えられる。

第 2 節　本研究の課題と今後の展望

まず，研究 1 で使用した保育者の子ども理解の的確性を測る事例について，妥当性は概ね保証ができると考えられる。しかし，量的分析などによってその信頼性・妥当性の検証ができていなかったことは課題であると考えられるため，今後この点について精査していく必要がある。また，今後は研修の量だけでなく，研修の質，すなわちどのような形式や内容の研修を行うことがより保育者の子ども理解の的確性を向上させられるのかを検討していくことが今後の重要な課題となるだろう。加えて，研究 3 のモデル検証において，「子ども中心的保育観」から子ども理解へのパスがみられなかったことは想定外であったため，今後の研究では，どのような要因の影響をうけ，「子ども中心的保育観」から子ども理解へのパスがみられなかったのかを検討していく必要があると考える。

最後に，今後の展望としては，これらの研究結果を踏まえて，現職保育者を対象とした，保育の質の向上に繋がる具体的な研修案を検討していく必要が考えられる。

引用文献

赤田太郎　2010　保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　心理学研究 81 巻 2 号 158 - 166

天野佳和　2023　大津市立保育所における障害児保育実践と保育者の保育観の形成過程についての研究　―1970~80 年代に着目して―　滋賀大学大学院教育学研究科論文集　第 25 号　1－11

Fred. A . J . Korthagen　in cooperation with Bob Koster , Bram Lagerwerf, Theo Wubbels　2001　Linking Practice and Theory –The Pedagogy of Realistic Teacher Education- Lawrence Erlbaum Associates,Inc.,Publishers　Routledge

池田愛・坂田和子　2020　保育者の子ども理解における保育記録に関する研究　福岡女学院大学大学院紀要　発達教育学　第 8 号　25 - 30

池田佐輪子・楠凡之　2019　保育所における子どもの愛着形成の理解と支援　北九州市立大学文学部紀要（人間関係学科）26 巻　1 - 22

池田佐輪子・楠凡之　2020　保育所における子どもの愛着形成の理解と支援　その 2　北九州市立大学文学部紀要（人間関係学科）27 巻　13 - 34
城元寿美・舞地勝人　2010　保育園での発達障害児への個別支援の取り組み　中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要　第 42 号　79 - 84
川西舞・米山直樹　2015　応用行動分析にもとづく視点から特別支援教育を考える　41 巻　29-35
片岡今日子・松井剛太　2022　保育者集団がリフレクションにおいて本質的な諸相への気づきに至る過程　―アクションリサーチによる縦断的検討を通して―　保育学研究 60 巻 2 号　57 - 68
厚生労働省　2009　保育所における自己評価ガイドライン　3 - 4
厚生労働省　2018　保育所保育指針解説
加藤曜子　2015　精神障害をもつ親と要保護児童対策地域協議会　流通科学大学論集―人間・社会・自然編―　第 27 巻 2 号　11 - 22
Larrivee,B. 2008 Development of a tool to assess teachers' level of reflective practice. *Reflective Practice* 9 341-360
Levy, T. M. & Orlans, M. O.（著）　藤岡孝志・ATH 研究会（訳）(2005）.
愛着障害と修復的愛着療法　ミネルヴァ書房　5－6
Liu Yijie, Kurihara Shinji. 2021　Preschool and Kindergarten Teachers' Assessments of Children with Special Needs and Influences on Their Assessments. *Asian Journal of Human Services* 21 (0), 29-41
Moon,J.A. 2004　*A handbook of reflective and experiential learning : Theory and practice.* London : Routledge Falmer
中島正夫　2014　保育所と幼稚園における発達障害がある子ども・「気になる子」の状況について　椙山女学院大学看護学研究　6　23 - 31
岡田尊司　2012　発達障害と呼ばないで　幻冬舎新書
杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃　2009　保育における省察の構造　幼年教育研究年報　31　5 - 14
杉山登志郎　2011 杉山登志郎著作集 2　軽度発達障害への道株式会社日本評論社 64
佐藤学　1996　教育方法学　岩波書店
佐藤智恵・七木田敦　2007　幼稚園教諭の Belief に関する研究―小学校教員との比較から―　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第 56 号　333 - 339
陳林奇　2020　保育者のトラブルへの関わり方と保育指導観との関連性　国際幼児教育研究　27 号　89 - 104
鈴木晴子・潮谷恵美・権明愛・山田陽子　2021　インクルーシブ保育に向けた保育者の養成・育成と課題Ⅳ　十文字学園女子大学紀要　51　133 - 142
冨田久枝・根本咲那　2019　インクルーシブ保育に対する保育者の意識―保育者効力感・人権意識に着目して―千葉大学教育学部研究紀要　67　89－96
Thomas,A.&Chees,S. 1986　The New York Longitudinal Study : Form infancy to early adult life. In Plomin,R.&Dunn,j(eds.) The study of temperament : Changes, continuities and challenges.LEA
吉岡一志　2007　保育士の成長を支える信念の形成過程　―ある保育士のライフヒストリーを中心に―　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　56 号　101 - 108